

東海支部「最近の異常気象と東海地方の農業」に関するシン
ポジウム(昭和52年7月19日,中部電力株式会社総合技術研
究所)要旨5編

誌名	農業気象
ISSN	00218588
巻/号	34巻1号
掲載ページ	p. 31-31
発行年月	1978年6月

支部だより

東海支部「最近の異常気象と東海地方の農業」に関するシンポジウム

日時 昭和52年7月19日

場所 中部電力株式会社総合技術研究所

研究発表

1. 東海地方における最近の異常気象について

名古屋地方気象台 北原 英一

最近では異常な暖・寒冬・冷夏・干ばつ、集中豪雨など変動の大きな天候が続出し、東海地方の農作物にも冬の寒害、夏の干ばつや大雨による被害が発生している。

1970年代前半の5年間は高緯度寒気が発達し、その結果として南北循環が卓越するようになり、変動の大きな天候が現われ、異常気象が多発するようになった。昭和49年3月の気象庁の報告では寒冷化傾向は今後10数年は続くと思われている。

2. 茶園における寒害の様相と防止法

農林省茶業試験場 青野 英也

チャは近年栽培地が高標高の高冷地までおよび、窒素肥料の多施によって耐冬性の低下もあって毎年寒害が発生している。最近、異常気象による地球の低温化が懸念される折から、高冷地的栽培条件下の茶の寒害は漸増が予想される。そこで今までの寒害に関する知見とその防止方法について整理した。茶の寒害は細胞内凍結を起こし、褐変する赤枯れと、土壌の乾燥凍結によって全体的に枯死する青枯れがある。その他、幹や枝の裂傷凍害もある。

以上の対策として先ず茶園の保温対策が必要で、その他、防風、蒸散抑制剤散布、施肥の適正化が考えられる。

3. 近畿地方におけるカンキツ類に及ぼした52年冬季寒害の影響

農林省果樹試験場興津支場 広瀬 和栄

昭和52年襲来した寒波は、カンキツ類に対して、西日本を中心に多大な被害をもたらした。この被害については、寒波による樹体の損傷程度が種類別に、また、地形や栽培方法で如何に異なるかを実態調査した。その結果、樹種ではネーブルオレンジが最も激しい被害を受け、ついでハッサクが受けた。地形としては冷気の停滞地帯は本調査では比較的少なく、むしろ寒風害の影響が大であった。栽培法として高接された晩柑類以外は耐寒性乏しく、ウインドマシン等による寒害防止策を考える必要がある。

4. 野菜の寒害について

農林省野菜試験場 吉川 雅夫

越冬野菜が冬の低温により受ける凍害を一般に寒害と呼んでいる。野菜は近年、施設、資材の開発により作型が多様化し、冬期における生育段階で寒害の様相もさまざまである。野菜が寒害を受ける条件は大体4つに大別される。①厳寒期の低温によって受ける凍害、②早霜による凍害、③晩霜による凍害、④貯蔵中、輸送中における凍害である。野菜の凍霜害件数を月別にみると4～5月に集中し、晩霜害の多いことを示している。年次別では最近10ケ年中14～17件の年が4年もあり、近年の異常気象を示している。さらに筆者は各種寒害防止対策についても検討した。

5. 台風7617号豪雨の際の耕地の水害と今後の対策について

名古屋大学農学部 山本良三・石川雅士

台風7617号によって、愛知県西部でも河川堤防の決壊等で耕地が水害に見舞われた。筆者等は水稻被害については冠水状態、冠水日数、出穂後被害時までの経過日数等によって分けて調査した結果、それらの間に著しい差が見られた。特に出穂後間もない状態で冠水害を受けたものほど被害は甚しかった。また出穂直前で長く冠水を受けたものは出すくみの状態で稲がすべて不稔になったものもあった。ただ1日程度の冠水期間の短いものは被害は極めて軽微であった。畑作物の被害では1日以上冠水したものはほとんど枯死した。

東海支部講演会

日時 昭和52年12月20日

場所 農林省野菜試験場

研究発表

1. 東海地方における昭和52年の気象概況

名古屋地方気象台 西原 功

この一年も大気環流は平年に較べ偏りが大きく、世界的に変動の大きい天候を出現させた。東海地方でも地域的、時間的に変動幅の大きい天候が出現した。季節別の主な天候の特徴は次の通り。

- 年末年始の大寒波に代表される寒かった冬。
- 雨が多く、暖かな日も多かった春。
- 後半は不活発であった梅雨活動。
- 盛夏期は前半の猛暑から一転不順な8月へ。